
定時制高校に対する地域臨床的支援の試み

関西大学大学院心理学研究科心理臨床学専攻

中田行重 中村 絢 日野唯香
丹羽由子 福山侑希 菅野百合子
横谷幸美

◆要約◆

ある定時制高校からの支援依頼に対し、筆者らは院生と教員からなるプロジェクトチームで対応することにした。開始当初は何を目標に何をしたらよいか不明瞭であったが、高校の先生方や生徒との接触を通じて次第にはっきりしてきた。活動内容も授業中の学習支援から次第に個別相談、グループワークへと変化してきた。先生方や生徒との接触やコミュニケーションを通じての細かな信頼関係の積み上げがこうした変化につながったと考えられる。まだ継続中の支援活動であるが、これまでの支援活動とこの変化の過程を整理し、今後の方向性について考察を行った。

キーワード：定時制高校、地域臨床、支援、グループワーク、進路

はじめに

ある定時制高校から筆者（中田）に「高校全体の生徒への対応に関して力を貸して欲しい」という依頼があった。このような依頼は筆者（中田）には初めてのことであった。とりあえず“検討してみます”とお答えしたところからこの支援は始まった。先生方と話し合いを重ね、1つのプロジェクトと考えて院生とチームを組み、高校に週2回、1回に3名の院生が支援に出かけるという体制が定着するようになった。そして、つい最近、筆者らが企画した進路に関するグループワークを1年生全体に対して実施するまでになった。しかし、地域臨床の多くの実践と同様、実践のモデルがない状況の中で筆者ら

は手探りでやってきた。ここに報告するのはその依頼から現在の支援状況に至るまでの経過である。

本稿は現在まだなお進行中のこの支援プロジェクトの経過を記述し、若干の考察を加えるものである。ところで、本稿では、通常の事例論文における“事例の概要”は省き、代わりに経過記述に事例の概要に該当する部分を含ませるようにする。というのも、本プロジェクトにおいては事例の概念が通常の個人心理療法と異なり、当初は何が事例なのかさえ掴み切れないところから始まった。つまり、取り組む対象もその取り組み方も不明確であったところから、手探りの関わりを通じて、その輪郭が次第に姿を現してきたのである。“事例の概要”を省き経過

記述に全てを語らせるのは、事例性が表れるまでのこの模索の経過自体が本プロジェクトの重要部分であると考えからである。

問題と目的

有馬（2003）はスクールカウンセラーのモデルとして（1）カウンセラーが生徒個人に対して個人カウンセリングを行う“病院臨床モデル”、（2）現場教師がカウンセラーを兼任する教師カウンセラーモデル、（3）現場教師へのコンサルテーションや他機関との連携を行いつつ、学校現場の対応を支援する“コーディネーターモデル”、（4）これら3つの全てを組み合わせる“統合モデル”を提唱している。このうち、（1）は専任のカウンセラーとして自ら個々の子どもに関わるものであるのに対し、（3）と（4）は学校をコミュニティとしてとらえ、学校全体のシステムに対して心理臨床的な視点からの働きかけを行うものであり、昨今のスクールカウンセリングにおいて数多く見られる。例えば、ここ数年の日本心理臨床学会大会における発表にはコンサルテーション、教師との協働、緊急支援、心理教育プログラムの導入、生徒間ネットワーク（ピア）形成、他機関との連携、更には、教育支援ボランティア大学生・院生の支援などの方法が挙げられている（例えば、安藤, 2007、安達, 2010、黒木, 2007、2008、藤田, 2008、広瀬・渡辺, 2008、伊坂, 2010、西川・廣澤, 2008、齋藤・守谷・杜浦ら, 2008、鈴木, 2007、谷地森, 2007、2010）。

こうして並べてみると沢山の方法が開発されつつある印象をうける。しかし、これらはいずれも文部科学省によるスクールカウンセリング事業あるいは、それを模した類似の事業の枠内で実践されたものである。そのため、この枠を超えたニーズに対してはこれらの方法ではカバーし切れない場合がある。たとえば、不登校を超えて引きこもってしまった生徒に対して、あるいは本稿で扱う定時制高校や通信制高校にま

ではスクールカウンセリング事業だけでは十分に手が届かない。そのような場合、援助者側が発想を柔軟にして対応することが求められる。地域臨床というパラダイムの発生の経緯の1つには、来談者型の相談ではどうにもならない地域のニーズがある。今後、臨床心理学が医学とは異なる1つの学問として独自性を発揮するためにも、有馬（2001）の（3）（4）のモデルを柔軟に発想していく必要があるだろう。加えて、学生ボランティアがこれほど重要な役割を負うようになった現在、それを如何に質の高いものにしていくかも心理臨床の重要な領域であろう。西川・廣澤（2008）もそれをスクールカウンセラーとして試みた経過を報告している。

経過

#1 (2010/01/26) ある定時制高校から2名の教諭が筆者（中田）のところに相談にお見えになった。「発達障害、精神障害などの困難を抱える生徒の数が多くなり、教員としてどのように対応すればよいか分からないので、支援をお願いしたい」ということであった。その1ヶ月程度前から、その高校の生徒の1人が本学の心理臨床カウンセリングルーム（以後、Coルームとする）に来談するようになっていたのであるが、それはその高校の先生方が親と本人を説得してようやく何とか来談させたのだということであった。先生方の願いは、Coルームへの来談という形態以外にも何か援助をいただきたい、ということである。筆者（中田）は“お役に立てるかどうかわからないが、検討してみます”とお答えし、今後、双方で再度、検討し、連絡をとりあっていこう、ということに合意する。

#2 (2010/04/16) 今度は教頭から中田に再度、支援要請の電話があった。中田が高校を訪問し、教頭、コーディネーター教諭、養護教諭と2時間面談した。教頭の案内で授業を行っている各教室も見学させて頂き、学校の状況をお聞きする（以下のとおり）。

〈事例および支援要請の概要〉

別の定時制高校では一昨年、ハートケアサポーターとして女性の臨床心理士が1/wk（年間30回）支援を行い、昨年は男性の臨床心理士が研究目的も含めて年間20回（1回3時間）来て支援を行い、アドバイザースタッフとして2名の院生が夜19:00～21:30（1人は8回、もう1人は16回）に支援に来た。そして年度末にその男性臨床心理士が講演会を行った。そのような取り組みを他校ではしているが、本校はこれまで何もしてこなかったため、現状は大変なことになっている。8年前はこの高校全体の発達・精神障害者は2～3名であった。定時制高校でも不合格者を出していたので入試の時点である意味でのスクリーニングが出来ていた。しかし、全日制に1クラスずつ増やすことになり、その分、これまでなら不合格になっていたような生徒が沢山、定時制に入ってきた。加えて、今年から授業料が無償化された。21歳以上は面接のみという簡単な試験であるので誰でも入ってくる状況である。ある生徒は精神科に通院しているのだが、そこの医者から「リハビリとして高校に行ったらどうですか」と言われて本校に入学してきた。高校はリハビリ施設ではないのに、それが現実的なものになっている。

この高校の1年生には色々難しい子がいて教師は大変である。うつ病、統合失調症、療育手帳所持者、支援学級在席経験者が新入生80名のうち5名（保護者による入学時のアンケートより）であり、それ以外にも座っていられなくて教室を飛び出す生徒、コミュニケーションがなく何を考えているか分からない生徒、教室で騒ぐ生徒、診断は受けてないが何か精神科の病気ではないかと思える生徒、病院通院者ではないがトイレで簡単にリストカットするような生徒等がいる。生徒同士のトラブルはあるし、障害を持った生徒も巻き込んでトラブルになることもある。これまでの教員の生徒指導の対応では立ち行かず、どう対応をしたらよいのか分からず、教員が困っている。定時制には支援学級

はない。

そのような生徒集団への外部からの支援として、かつて講演会に来てくれた精神科医からは「登校刺激を与えないように」という助言があったが、ではどうすればよいのか、が分からない。また、これまで来てくれた精神科医や、今年は地域ブロックの拠点校であるため週1回訪れる臨床心理士も、（定時制高校の時間帯である）夜間まではいてくれない。

生徒のいる夜にご支援いただけると有難いという依頼であった。中田は支援できる可能性のある形として、①院生による学級内支援、②院生による別室支援、③教師へのコンサルテーション、④外部機関紹介・連携、⑤クラス内でのグループアプローチなど、の5つを提案し、次に会うことを約束した。院生による支援に対して高校側は特に関心を示し、本校における支援サポーター事業として活用できる予算として3名の院生が各10回ずつ訪問できる交通費程度の補助金があるとのことであった。

#3 (2010/05/15) 中田は教育臨床に関心のある3名の大学院生を連れて高校を再訪した。チームを作る必要を感じたからである。校長も交え、教頭と筆者らによる話し合いを行う。院生と中田によるプロジェクトチームを組んで支援にあたることを校長・教頭に表明する。もし予算の増額が可能なら院生を6名にしたいという点で合意する。教頭の案内で校内を見て回り、幾つかの授業も視察する。その後、学校側が扱いに困っている生徒のうち何名かについて校長、教頭から具体的に名前を挙げて説明を受ける。その一例を以下に示す。

- 知的障害、発達障害があり、授業が分からず教室を出たり入ったりする生徒。
- 授業中、先生の話を見聞かず、教室後ろの黒板に一心に単語を書き続ける生徒。
- ぶっきらぼうに言うだけ言って教室を出て行くので他の生徒も馴染めない様子。
- 療育手帳の申請をこちらが示唆しても、その気も全くないような親。

- 職業適性検査では知的な問題は見出されなかったが仕事が出来ない生徒。
- 集合するとスーッとみんなから離れていく子。目を見て話が出来ない生徒。
- 掛け算の6の段以降を教わっていない（出来ない）生徒。
- うつ、統合失調症などの精神障害があり、静かだが友達が作れない生徒。
- 異性に手当たり次第、ストーカー的に声をかけて女の子を脅かす生徒。
- ずっとフードをかぶっているため、その生徒がどんな顔か知らない先生さえいる。他の子が気味悪がっている。

#4 (2010/09/08) 前回以来、教頭のご尽力で教育委員会から更に院生3名分の予算をつけて頂けることになり、全6名の院生と中田のチームで支援に当たることになった。その院生と中田が高校を訪問し、校長、教頭、特別支援教育コーディネーターの先生と話し合い、今後は1週間に2回、院生が3名ずつ高校を訪問することに決まる。この時点で先生方は、筆者らの支援を教室での学習支援と考えていたようであったが、筆者らは自分の専門性を活かすほうが、より貢献できると考えていた。結局、当初の1ヶ月は授業に入って学習支援をすると共に生徒を観察することをメインの仕事とする。個別に生徒と話す場合は、廊下にあるコモンスペースや図書室を利用して良いこと、相談室を筆者らの居場所にする、を先生方と確認する。その後、幾つかの授業に入らせて頂く。その後、特に先生方が問題を感じている生徒や療育手帳をもつ生徒、特別支援のついている生徒について説明を受ける。

#5 (2010/09/14) 院生3名が1～2年生の各授業に1名ずつ入り、生徒の様子を視察したり、その脇で学習支援をする。給食時間に校内の食堂を見学する。教頭から学校の全体像（在籍数、年齢構成、進学・就職状況等）について説明を受ける。生徒の顔を覚えるため、生徒の顔写真付き名簿を用意して頂く。それにより筆者らは

生徒の確認が容易になった。教頭から他の先生方に対して「関大心理臨床カウンセリングセンターと提携し、学習支援サポーターとして入って頂く」というアナウンスをして頂いていることを確認する。

#6 (2010/09/16) 院生が1年生の各授業に1名ずつ入り、2時間にわたり様子を視察し、生徒の学習支援をする。給食時に校内を巡回すると、校内の食堂を利用している生徒はほんの一部で、校外へ出る生徒が多い。3時限目は1年生全体の体育。院生は4種目のうちの3つ（テニス・バレーボール・フィットネス）に分かれて見学し、生徒に話しかけ、コミュニケーションを図った。教頭と今後の支援について話し合いをする。

#7 (2010/09/21) 体育祭に向けた1年生の合同練習を見学する。給食時間に食堂を見学し、校内を巡回する。3時限目は1年生の各授業を見学する。その後は生徒の顔写真付きの名簿を見ながら、校長に生徒の様子や家庭環境について説明を受ける。

#8 (2010/09/28) 2時限目は3年生の各クラスに1名ずつ入って授業を見学し、学習支援も行う。給食の時間は相談室にて待機する。3時限目は1年生の各クラスに1名ずつ入る。3時限後は教頭と今後の支援や最近の生徒の様子について話し合う。

#9 (2010/10/05) 2年生の教室で授業を見学する。給食時に教室を巡回して生徒への声掛けを行う。また、給食時に院生の1人が保健室に入り、養護教諭から常時保健室を訪れる複数の生徒について情報をもらう。また、養護教諭からある生徒への学習指導を依頼される。3時限目にその生徒への学習指導を行う。

#10 (2010/10/07) プロジェクトチーム全員（院生6名と中田）で訪問。2時限目は学習支援。3時限目に教頭、1年生の全担任、養護教諭を交えて筆者らと高校側双方が考える支援のあり方について話し合う。筆者らは進路やフォーカシングのグループワークを行うことで生徒に学校

生活への動機付けを高め、生徒間の情緒的交流やコミュニケーション能力を高めることを考えていることを伝えた。各担任の先生の生の意見を直接聞くことができたこと、双方の共通点やズレ、課題などが明確になったことなどから、今後の支援を組み立てる上で礎石になったと感じられる有意義な時間であった。

#11 (2010/10/19) 本格的な支援にあたり、生徒に筆者らを知ってもらうため各クラスのホームルーム（以後、HR とする）で10分程度時間を頂いて、筆者ら学生ボランティアの自己紹介のプリントを配り、アンケートを実施。また、授業を抜け出してきた女子生徒と接触し、その生徒の話をお聴く。その後、その先生と生徒や今後の支援について話し合う。教頭からはグループワーク実施の上で具体的な案を提出することを求められる。筆者らの提案を学校側が検討して下さっていると感じ、意欲が高まる。筆者らの居場所としてコンスペース・保健室・図書室が候補に挙がる。

#12 (2010/10/21) 給食時間、筆者らの1名が保健室で生徒と話をし、2名は校内を巡回する。3時限目の体育ではバドミントン、バスケットボール、卓球の授業に各1名が参加し、共に体を動かして生徒と交流しながらその様子を観察する。

#13 (2010/10/26) 給食時は校内を巡回する。その後、HR から出てくる生徒へ声掛けする。話しかけた生徒たちはあいさつや声かけに応じ、1週間前のアンケートの成果を実感する。

#14 (2010/10/28) 給食時間から3時限目の途中まで保健室で待機をする。文化祭の練習のために、琴の練習をしに来る生徒が数名来る。養護教諭からは、筆者らが体育の授業に入り、生徒と関わりを持ってほしいという希望が聞かれる。

#15 (2010/11/02) 校内を巡回したり、廊下で待機したりして、教室から出てくる生徒に声を掛ける。給食時間に文化祭の練習を熱心に行っている生徒らにも声を掛け、その様子を見学する。

HR は文化祭の準備であり、クラスに入って練習風景を見学する。また、グループワークの2案（構成的エンカウンター・グループ、や『このころの天気』グループ）を提出する。

#16 (2010/11/11) 文化祭1日目に院生全員で訪問展示見学と模擬店回り。支援で関わっている1～2年生の出店する模擬店を中心に回る。少しずつ顔見知りになっていた先生や生徒のほうから声を掛けられる一方で、関わりが無かった生徒には、行列に並びながら話しかける。授業中には余り交流の見られない年齢差のある生徒間にも授業中とは違う交流や協力し合う様子が見られる。

#17 (2010/11/16) 3時限目のHR で10分程度の時間を頂き、#11のアンケートにコメントを付けて返却し、次に院生6名の自己紹介用紙を配布する。配布後はHR を観察する。

#18 (2010/11/18) 今回からは授業に入らず、相談室で待機することとした。給食時間に生徒が1名来室する。生徒と院生3名全員とで生徒の興味のあることについて自由に話す。3時限目開始のチャイムが鳴ったので生徒に授業に出るよう促すが、生徒はそのまま相談室にいることを選ぶ。4時限目は授業に行く。生徒から「相談室に来たと先生に言わないで欲しい」と言われた為、教頭には生徒名は伝えず、来室者があったことだけを話す。

#19 (2010/11/25) 今回は院生3名に加え、中田も訪問。教室に入らず、いつも図書室に独りでいるある1名の生徒と会う。食事時には1名の生徒が相談室へ来室する。授業後、ある1年生の担任が相談室に来室し、対応に苦慮している生徒への対応方法を教えて欲しいと話される。また進路担当の先生から進路HR の時間に進路に関するグループワークの実施依頼がある。筆者らの専門性を先生方が認めて下さりつつあるのを感じる。

#20 (2010/11/30) 相談室に待機。給食の時間に生徒1名が来室し話をし、3時限も引き続いて授業に一旦出席するが戻ってきた生徒と話

をする。生徒には、ここで話した内容は話さないが授業中に来室したことは教頭に伝える、として、了承を得る。3時限目、教頭が図書室に登校する生徒（上記）が欠席であることを伝えるに相談室を訪れた際、ドア越しにその生徒と目が合い、生徒は教頭に見られたことを納得した様子であった。

#21 (2010/12/02) 相談室で待機。担任の1人に図書室に通学する生徒（上記）の情報をもらう。3時限目には進路担当の先生と、筆者らが主体となって行ことになった翌年1月18日の進路に関するグループワークについて打ち合わせをする。普段使わない視聴覚室の使用を認めて下さる。進路HRのイメージを担当の先生と共有できたと感じる。

#22 (2010/12/07) 翌年1月の進路HRで行う内容について、院生間で話し合いを行った後、給食の時間に来室した生徒と話す。その後、先生との打ち合わせを行う。

#23 (2010/12/16) 翌年1月の進路HRのために院生が作成したプレゼンテーション資料等を持参し、進路担当の先生と打ち合わせを行う。先生から、生徒が仕事を選ぶ理由や感想を記入する書類を追加資料として準備しては？との提案がある。それが必要かを次回（#24）までに筆者らで検討し、必要と考えれば筆者らが追加資料を作成してくるとお伝えする。この日は生徒が2限で帰宅していたため、先生との打ち合わせに終始する。

#24 (2010/12/21) 相談室で待機。進路指導担当の先生と進路HRについて打ち合わせ。先生のご意見として、例の追加資料は、生徒の集中力やまとめの発表を行う生徒の負担軽減の観点からどうしても必要とのこと。院生の1名が図書室で上記生徒の対応をする。インターネットサイトを一緒に閲覧したり、その生徒が取り組むべき課題について話し合いながら、生徒の家族のことや最近興味を持っていることについてその生徒が話すのを傾聴する。

#25 (2011/01/13) 次回（#26）の進路HRで

は求人誌の切り抜きを掲載した院生作成のPower Pointを用いてアルバイトの探し方のプレゼンテーションを行った後、5～6名の小グループによるグループワークを行う予定である。小グループで各生徒にきめ細かな対応をするには、本プロジェクトチームの6名の院生では人手が不足し、新たに4名が加わるようになってくる。今回は本チームの通常の3名と新しい4名を加えた院生7名で高校を訪問した。新しい4名の院生は今回が初めての高校訪問となるため、2時限目に1年生のクラスに入り授業を見学する。給食の時間から3時限目の終わりまで院生1名が図書室に通学する生徒に対応し、その他の院生は視聴覚室にて進路HRのリハーサルを行う。

#26 (2011/01/18) 予定通り、3～4時限の進路HRの時間に1年生全クラスを対象に「アルバイトの見つけ方」をテーマにグループワークを行う。新たに4名が加わった計10名の院生のうち1名が全体の司会を、他9名が小グループのファシリテーターを務めた。まず全クラスを視聴覚室に集め、司会の院生がPower Pointを用い、アルバイト情報誌の見方を説明する。その後、1クラスを3つの小グループに分け、全9つのグループ毎にアルバイトに関する話し合いを行う。院生が各グループに1人ずつファシリテーターとして参加する。筆者らは用意した資料に実際の求人誌などから抜粋した13のアルバイトやボランティアの案内を掲載しておいた。生徒はそこから自分がやってみたいと思うものを選び、選んだ理由を1人ずつ発表するワークを行った。その目的は、進路についての意識を高めると共に、「主体的に選ぶ・伝える・聴く」体験をすることにあった。グループのメンバー全員が話せる場となるよう、ファシリテーターは次の3つのルールをグループワークの冒頭に生徒に確認した。①人が話しているときはしっかり聴く、②いいところを見つける、③否定するような発言をしない。最後に再度全体で視聴覚室に集まりグループの代表者が感想を述

べた。

このグループワークについてファシリテーターの院生からは「思ったようにいかなかった」「あまり深められなかった」との懸念があったが、生徒からは「みんなが自分に興味を示してくれて嬉しかった」「意外なアルバイトがあることを知ることができた」「自分の思いつかないような意見もあって、みんなそれぞれの考えがあることがわかった」などの感想が寄せられた。担任の先生らからは「教師主導では考えられないほど活発な話し合いが行われていた」「こんなことができると思っていなかった生徒の言動に驚かされた」「彼らもやれば出来る、と感激した」「1学期に1回はやってほしい」と評して頂けるなど、好評であった。

1人の生徒を例に挙げると、アルバイトを選ぶにあたって「自分は暗いから、明るくなるためにアルバイトをしたい」という男子生徒は「人と目を合わすことが苦手」だと自分自身の課題について話をした。それに対して他のメンバーは「以前に比べると明るくなった」と伝え、優しく励ます場面もみられた。全体の振り返りの際は、今まで人前で発表することが苦手だった彼がグループメンバーの後押しもあり、自分の感想を発表できた。

補足 なお、上記は高校を訪問しての活動のみ記述しているが、それ以外の活動にも大変な時間と労力を使っている。高校での活動について院生各自が大学で記録をとり、1つのフォルダにまとめている。また、高校へ行っていない日に院生は学外実習などから夕方遅く大学に戻ってきて長い時間をかけて支援活動の振り返りや今後の支援のあり方のディスカッション、アンケート作成、自己紹介プリント、進路HRの資料やPower Pointファイル作成などを何度も行っている。

考察

この論文原稿の提出日ぎりぎりになって、よ

うやく進路HRのグループワークを行った。一見してそれが目標だったかのようだが、総体としては模索しながら実践するという経過であり、それは進路HR以後も続いている。加えて、当初の1ヶ月は生徒や先生方に自分たちがどう見られ、何か役に立っているのか、という不安もあった。しかし、#10で先生方との話し合いを経て次の#11に先生方からグループワークの企画案の提出を求められた頃から、先生方からの期待を感じるようになったのと同時に筆者らがすべき支援の方向性と枠組みがぼんやりと輪郭を現してきたように感じた。今も続行中のプロジェクトであるが、これまでの支援活動を整理し、今後のあり方を考えておきたい。

1. これまでの支援活動

これまでの活動内容を整理すると次のようになる。

- (1) 先生方との話し合い
- (2) (当初の1ヶ月) 授業への入り込みによる生徒の視察、生徒との接触、学習支援
- (3) 体育の授業や文化祭に参加して生徒（特に見学中の生徒）との接触
- (4) 生徒の視察、接触から考えた、支援活動の企画、提案
- (5) 生徒に対する自己紹介（HRにおけるアンケートなどを活用して）
- (6) 個別相談（相談室、図書館、保健室、廊下など）
- (7) 相談室での待機
- (8) 進路HR グループワーク
- (9) 資料（アンケート、進路HRのPower Pointファイル含む）と活動記録の作成

2. 模索の支援活動から次第に方向性の輪郭が見えてくる経過

支援活動期間の初めの1ヶ月は授業を行っている教室に入り込み(2)、授業が分からず、集中力や意欲の低い生徒の多い状況を見ることができた。先生方が筆者らに支援要請をしてきた

事情も見ることができた。先生方とは1年前から何度も話し合いを行い(1)、生徒の様子を聞いてはいたが、実際に見て生徒らと触れることで先生方が筆者らに学習支援をメインの仕事として考えた(#4)理由も十分理解できた。授業に入ることで筆者らに関心を寄せ、声を掛けてくるようになった生徒もいるが一部に過ぎず、生徒全員とコンタクトを取ることは不可能と思考した。また、元々動機付けのない生徒に対して教室で学習支援をしてもその効果には限界があるように思われた。筆者らは生徒らに学ぶことへの関心、動機付けを促すことで何か貢献できないかと考えた。それがグループワークの提案(4)となった。

ところで、授業に入り込むことで一部の生徒は声を掛けてくるが、多くとは個人的な接触が出来ないままであった。筆者らは生徒から「自分たちを観察しに来る人」とだけ見られているように感じていた。グループワークや個別相談を行うにしても、生徒にとって筆者らが異物であり続けては、生徒は安心できず、支援の効果も上がらないだろうと思った。そこで、生徒から筆者らどのように受け取られているのかを知るために、まずは筆者ら自身が自己開示する必要を感じ、アンケートという形を利用して筆者らの自己紹介を行った(5)。しかし、筆者らの自己開示をしても、何らかの葛藤を抱える生徒には教室での接近は限度があると考え、個別に接触する場・機会を設けることが望ましいと考えた(6)。

しかし、これらは筆者らが課題と考えたことであり、先生方ではない。先生方がどのようにお考えになるかによって対応は異なるので、先生方と話し合う必要があった。日頃から教頭や特別支援教育コーディネーターとはコンタクトをとっていたが、現場の担任の先生とは交流がなかった。筆者らにとって現場の先生がどうお感じになっているかは最も気になることだった。教頭が1年生の担任全員に加え、校長、養護教諭と筆者ら7名による面談の場を校長、教頭が

設定して下さった(#10)。先生方とは互いの考えを意見交換でき、有意義に感じられた。筆者らを外部からの“お客さん”ではなく共通目標をもつ者と考えたからこそ、真剣な話し合いになったのであろう。これは筆者らが高校現場に受け入れてもらうのに必要な儀式だったとも言えよう。それ以後は先生方から筆者らに話しかけていただくことが増え、筆者らのグループワークの提案に賛同いただけるようになった。

進路HR(8)は進路担当の先生と何度も相談しながら準備をすすめた。筆者らとしては少なくとも、生徒がアルバイト探しに多少なりとも関心をもち、求人誌などを手に取るようになるように考えた。しかし既に進路担当の先生による就職・進路指導も行われているので、それとの重複が出来るだけ少なくなるようにしたかった。求人誌の一部をコピーし、それ(仕事内容、給与、時間などの欄など)に書かれている内容を理解できるようにしたかった。そこで、高校生に馴染みのあると思われるあるハンバーガーチェーン店の求人欄を選び、power pointに載せて説明した。また、授業中の様子から余りコミュニケーションがないと思える生徒も多く、それは先生方の懸念でもあったので、生徒が自分の関心を友達と会話して共有できることを目指してアルバイト探しのpower pointによる合同説明会に続いて小グループでの話し合いを企画した。#26に記述したように先生方は生徒が自分の意見を発表できたこと自体に驚き、生徒の可能性に手応えを感じたように思われる。ここに至って筆者らは初めて自分たちの専門性を発揮できた感じをもてたが、そのためには進路HRだけではなく、むしろそれまでのその他の活動の積み重ねが重要であった。

3. 支援活動の今後

進路HRが好評だったことから、今後は他の学年への実施を先生方から求められるであろうし、筆者らも今回の経験を踏まえ、更に修正を加えてそれに応じたいと考えている。桃野

(2006)は進路選択により高校生のアイデンティティの形成を促進する臨床心理的援助を述べている。筆者らの試みもそれに近いものであるが、定時制高校においてグループワークの形式でアルバイト探しというより身近なテーマで行っている点が筆者らの独自の部分である。また、未だ実施していないがフォーカシングなど心理的内面を見つめるグループワークも行うことになるかもしれない。グループワークを時々行うようになれば、今後はその効果や、生徒別の効果の高低などの調査をすることが必要であろう。

グループワークとは別に、通常は相談室に待機し、個別相談や時折授業に入って生徒を支援することが活動のベースとなる。そして生徒への接触を少しずつ積み重ね、生徒から接近しやすく感じられるようにしたい。これは地味な活動であるが、生徒が来談しなくても筆者らが同じ場所に定期的に居続けることが「何かあったら相談できる」という安心感を学校に与えることになる。また、時間が経つにつれて新たなニーズが出てくる可能性もある。この通常の活動の効果についても調査し、今後の活動の指針にする必要があるだろう。

補 足

この原稿の初校が刷り上がってきた頃、次年度の支援の継続を要請された。そのなかには春秋に一度ずつ、1～2年生のそれぞれに対してグループワークをしてほしい、というものも含まれていた。また、ずっとフードをかぶったままだった生徒（#3）が（これまではせいぜい図書室にしか登校しなかったのだが）、筆者らとの小さな交流が積み重なった結果、ついに筆者らの相談室に足を踏み入れるようになり、紙細工のプレゼントまでできてくれた。

文 献

安達知郎（2010）：「つながりにくい」女子中学生を抱えた家族への支援『日本心理臨床学会第29回大会論文集』45。
 安藤徹（2007）：学校風土を活用した学級アセスメントの提案 —教師への結果のフィードバックプロセスに

着目して—『日本心理臨床学会第28回大会論文集』136。
 有馬比呂志（2003）：スクールカウンセラーの機能と役割 藤土・秋山ら（編）『学校における心理臨床』『地域に生きる心理臨床』北大路書房 pp. 50-60。
 藤田恵津子（2008）：カウンセラー通信による心理臨床的援助とその意義『日本心理臨床学会第27回大会論文集』113。
 広瀬真紀子・渡辺あさよ（2008）：教員を支援する試みとしての「授業まるごと観察」『日本心理臨床学会第27回大会論文集』152。
 伊坂はるみ（2010）：学校における緊急支援活動 初期対応の検討『日本心理臨床学会第29回大会論文集』42。
 黒木幸敏（2007）：中学校におけるアサーションの日常化をめざしたプログラムの研究『日本心理臨床学会第26回大会論文集』136。
 黒木幸敏（2008）：中学校でのアサーション・トレーニングを導入したじめ防止プログラムに関する研究『日本心理臨床学会第27回大会論文集』151。
 桃野泰子（2006）：進路選択を軸に高校生のアイデンティティ形成を心理臨床的に援助する試み『学校臨床心理学研究（北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理専攻）』4：63-79。
 西川絹江・廣澤愛子（2008）：学校現場における「効果的な地域支援活動」に関する考察『日本心理臨床学会第27回大会論文集』86。
 斎藤富由起・守谷堅二・社浦竜太ら（2008）：高校生の居場所感に関する研究 その1『日本心理臨床学会第27回大会論文集』398。
 鈴木淑元（2007）：“学校の荒れ”学級崩壊への緊急支援—スクールカウンセラーとしての効用と限界—『日本心理臨床学会第26回大会論文集』72。
 谷地森久美子（2007）：学校という場が“生徒を抱える器”となるための教師—SCの協働について『日本心理臨床学会第26回大会論文集』108。
 谷地森久美子（2010）：思春期臨床と学校臨床をつなぐスクールカウンセラーの可能性について『日本心理臨床学会第29回大会論文集』38。